

第2学年 社会科学習指導案【当日修正版】

2年1組 男子24名 女子15名 計39名

指導者 龍瀧 治宏

【授業】 9:40~10:30 会場 2年1組 (3階)

【協議会】 10:45~11:55 会場 2年2組 (3階)

1 単元名 世界と比べた日本の地域的特色 ―人口の特色―

2 単元について

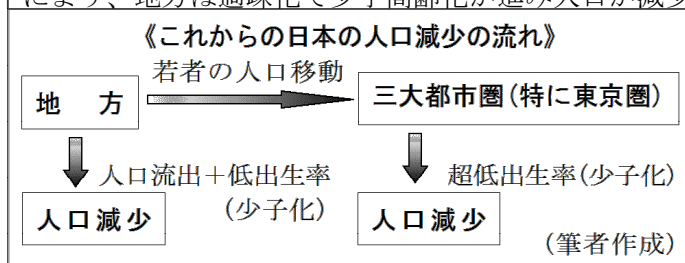
(1) 単元設定の趣旨

この単元は、中学校学習指導要領の地理的分野の大項目(2)イ(イ)「世界的視野から日本の人口と人口密度、少子高齢化の課題を理解させるとともに、国内の人口分布、過疎・過密問題を取り上げ、日本の人口に関する特色を大観させる」ことで、人口の面から日本の地域的特色を理解させることをねらいとしている。

日本の人口の歴史は、弥生時代は約60万人、奈良時代は約450万人、平安時代は650万人、鎌倉時代は約800万人、江戸時代は約3,000万人、明治時代は約4,000万人のように増加している。このようにして増え続けた人口が、2008年に1億2,808万人ピークを迎え減り始めるという歴史上初めての展開になった。2012年1月に公表された国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口によると、日本の人口は2060年には今より3割減の8600万人、2110年に4286万人になる。2015年の人口は、1億2711万人(15年国勢調査)なので、これから100年でわが国の人口は約3分の1にまで減少する。これほど大きな人口の変化は私たちの暮らす日本の経済・社会に大きな影響を与えるに違いない。安倍晋三内閣は、2015年10月「アベノミクス第2ステージ」で「少子高齢化に歯止めをかけ、50年後も人口1億人を維持」する経済政策を発表し、「人口」を重要な政策目標に掲げた。戦後初めて政府が「希望出生率1.8」の数値目標を掲げ、戦前の富国強兵政策の一貫として提示された「産めよ殖やせよ」のスローガンが連想され、人々の反発を招く恐れがある。しかし、その反発のリスクを考慮しても数値として発表せざるを得ないほど日本の少子化は最終局面にまで追い込まれていると考えられる。したがって、この人口減少など人口に関する問題は、日本の主要な社会問題の一つなのである。社会科では、これまで過剰人口問題、過疎過密、高齢化、少子化、そして上記の人口減少へと、内容を変えながら長年にわたり人口学習が行われてきた。現行の中学校学習指導要領での人口学習をみると、地理的分野での扱いが大きく、世界と日本の人口分布、出生率と死亡率、人口ピラミッドの変化、過疎・過密地域の比較など多岐にわたる。他に公民的分野では財政・社会保障問題との関連で日本の少子高齢化を扱っている。また、日本全体としては人口減少社会に入っているものの、世界的には人口が急増している。日本国内でも、人口移動により高齢者の多い地域もあれば、若者の多い地域もある。世界や日本国内の人口構成は地域によって様々であり、それぞれの地域の状況を反映している。

ところで、日本で用いる人口学は、形式人口学を中心として周辺に経済人口学、社会人口学、生物人口学、政治人口学、歴史人口学がある。これら社会学の本単元で獲得させたい研究成果を基に人口という変動する社会を認識していく。以下に、その理論を示す。人口は、「人口変動の3要素(出生・死亡・移動(転入・転出))」により増加したり減少したりすることの認識が必要である。そして、この「人口変動の3要素」は、人口構造(男女、年齢、配偶関係、教育程度、労働力状態、就業上の地位、産業、職業等)の影響を受ける。この人口構造をもっとも典型的に表したものは、男女・年齢別に構成した「人口ピラミッド」である。社会が近代化し経済的に豊かになると、なぜ多産多死から多産少死、少産少死へと変化していくのかを説明する唯一の人口理論が「人口転換論」である。人口動態の変化は、経済社会の発展に伴い、多産多死から多産少死を経て、やがて少産少死に至る過程を示す。その第1段階は、出生率も死亡率も高水準にある低発展段階である。伝統的農業社会では死亡率が高く、また飢饉、疫病、戦争等のために人口の動向は不安定である。この状態で農業社会を支えていくためには、大家族を必要とし高い出生率が維持される。また、宗教や社会制度などによって高出生率が維持されることもある。その結果、近代化前の社会では、変動する高死亡率と普遍的な高水準の出生率により、人口増加の変動は大きいものの、平均的には人口増加率は低い状態にある。第2段階は、出生率は依然として高水準にあるが死亡率が急速に低下する段階である。都市化・工業化が進展し、さらに公衆衛生及び医療水準も発展することによって、高い死亡率が徐々に低下を始める。しかし、出生率は、死亡率と違って、外的変化によって直ちに反応するメカニズムを持っていないため、高水準のまま維持され、死亡率低下に伴って、それまで経験

したことの無い人口増加がもたらされる。第3段階に入ると、出生率も死亡率を追随して急速に低下し、出生率、死亡率とも低水準に達して安定化する。出生率が低下する理由として、乳幼児死亡率の低下により出生数を減らしても家族・社会の存続が可能となること、子供の養育コストの増大、女性の自立化などが挙げられる。日本では、明治維新以前が多産多死、明治から昭和30年代半ばまでが多産少死、昭和30年代半ば以降が少産少死の段階であると考えられている。このような段階を経て、日本の地域的特色を表す人口問題には、①少子高齢化による人口減少、②東京一極集中による過疎過密の2つが挙げられる。①は、上記で説明した「人口転換論」のためである。日本は他の国々と比べて急速に少子化と高齢化が進んだ国になっている。②は、高度経済成長時代から大学や企業が多く、地方から若い世代が大量に移動してきているためである。そのため地方では過疎化が進み、少子高齢化になっている。一方、三大都市圏には、若い世代の大量移動により過密化が進むことになった。通勤・通学時の電車やバスの混雑、交通渋滞、ゴミ問題、住宅不足から地価の高騰、郊外ニュータウンからの長時間通勤など多くの都市問題が発生した。その中でも特に東京に人口が一極集中し、都市問題を悪化させた。その都市問題のために、家賃が高くなり安心して家族が暮らすにはアパートの部屋は狭い、待機児童が全国で最も多く、郊外に出た場合は長時間通勤のため共働きも難しい、とりわけ地方出身者は親の支援も受けられないので育児環境が悪く、東京の出生率は1.13と全国最低である。したがって、若い世代（生産年齢人口）が一極集中で東京に集まっているが、東京では結婚しても出産や育児をしにくい環境であることから「人口のブラックホール現象」化していると言える。つまり、東京一極集中により、地方は過疎化で少子高齢化が進み人口が減少している。東京では、若い世代が移動し存在しながらも過密による都市問題から少子高齢化が進み人口が減少している。この地方の人口減少と三大都市圏（特に東京圏）の人口減少の二重構造が、世界と比べて日本を少子高齢化・人口減少を加速させた原因である。



これらの説明より本単元で獲得させたい概念は、「わが国の人口変動の3要素」、「近代社会に進むと多産多死から少産少死へ変化していく人口転換論」、「東京一極集中による人口のブラックホール化現象」の3つである。日本の人口の特色をただ覚えるのではなく、未来に生かせる概念を身に付かせることで、持続可能な社会の形成者を含めた市民的資質の育成につなげていきたいと考えている。

(2) 生徒の実態

地理・歴史的分野ともに、単元のはじめに「どのような」「どのように」といった課題をもとに基礎的・基本的な事実を確認する学習を行い、「なぜ」といった課題に対して、原因や仕組み、法則などの概念を獲得する学習を行っている。そして、単元の終わりに「どちらがよいか」や「最も重要なのは何か、誰か」といった課題をもとに、価値判断する学習を行い、全体として社会について分かる（社会認識）という学習を行っている。価値判断する学習においては、討論の学習活動を取り入れてきた。その理由は、討論は根拠をもとに主張したり反論したりしながら議論が展開されることから、自分の意見との共通点や相違点について比較・分類・関連付けが可能であり、異なる視点や価値観に気付くことができるので、思考力・判断力・表現力を育成する効果が期待されるからである。

生徒はこれまでに、歴史的分野で「縄文人は、南アメリカ大陸に渡ったのだろうか」、「縄文時代と弥生時代、タイムスリップするならどちらがよいか」、「イギリスはEUを離脱して利益があるのだろうか」、「アマゾンはこのまま開発を続けてもよいのだろうか」という課題で、様々な資料を読み取り、それを根拠にして合理的に判断をしてきており、市民的資質は少しずつ高まりつつある。

しかし、市民的資質の育成には、社会認識が不可欠であるが、その社会認識である社会諸科学の研究成果を通して社会の仕組みを認識することが不十分であると感じている。不十分が故に経験知や感情を根拠にする場面があり合理的な判断と言えない場面があるからである。そこで、市民的資質をさらに育成していくために、地理的分野で、より現実味を帯びた社会問題（ここでは人口問題）について、多面的・多角的な視点に立って社会的な見方・考え方を育てていき社会認識を深めることが重要であるとする。また、学習内容を図式化することで社会認識をより深めることにつながる。

3 教科の本質に迫る授業づくり

人口問題から日本の地域的特色を捉える上で、仮説吟味学習を取り入れ問いを工夫することで持続可能な社会づくりに向けて社会認識が深まり、市民的資質がより育成される。

本校の研修主題は「主体性の高まりをめざす課題学習」であり、生徒が主体的に課題を解決していく学習が長年求められてきた。また、「学習指導要領の改訂の視点」における「どのように学ぶか」という観点では、「主体的・対話的で深い学びの視点からの不断の授業改善」が強調されている。その中で「問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか」「自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているか」ということも求められている。これらを満たし、社会認識を深め、市民的資質をより育成する学習方法として、本単元では、岡崎誠司氏（富山大学）が提唱している「仮説吟味学習」を設定した。

「仮説吟味学習」とは、「子どもが教育内容に関わる自らの問題を設定するとともに、問題に対する根拠ある仮説を設定し、子ども自身が、その正当性・合理性を個人の側と社会の側の両面から吟味する過程を保障する学習」である。生徒は、学習対象が具体的で個別的な対象であってはじめて、仮説を設定することができる。ただし、その場合、生徒は個人の側から仮説を設定することとなり、教師の指導なく仮説を吟味しても常識的認識にとどまることとなる。そこで、まず第一にこの学習では、社会システムの側から仮説を吟味する過程を導入することによって、視点の転換を図ることをねらっている。

また、「仮説吟味学習」による授業づくりの第二のねらいは、生徒が地域の事象理解にとどまることなく、地域的特色を社会システムとして解釈し、より良いシステムを主体的創造的に考えることにある。「仮説吟味学習」による授業づくりでは、個人を超えた社会システムそのものを認識対象とし、生徒にシステムそのものを正しいものとして受容させるのではなく、なぜそのようなシステムとなっているのか構造の解明を行わせたり、そのシステムの背景や原因を探らせ、問題を明らかにさせたりする。そこで、授業は、原則として「個人の側から仮説を設定する過程」と「社会システムの側から仮説を吟味する過程」と「仮説を修正・再設定する過程」の3段階構成となる。

本単元における構成論理は以下のようにになると考える。「個人の側から仮説を設定する過程」では、「東京は、全国から多くの若者が移動してきているのに、なぜ少子化が進むのか」という「問い」に対する仮説を設定する。「社会システムの側から仮説を吟味する過程」では、東京の超低出生率を過密から生じる都市問題の影響から吟味していくことで、地方の少子化と都市の少子化の二重構造が、人口減少を加速させた原因であることが明らかになる。「仮説を修正・再設定する過程」では、「少子化を食い止めるためにどのように解決すればよいのだろうか」という問いで、最終的に持続可能な社会づくりに関わる課題を解決するための方法を合理的に判断させていくことで、持続可能な社会の形成者を含めた市民的資質の育成につなげていきたいと考えている。

4 単元の目標

- 人口の歴史に着目しながら、人口から見た日本の地域的特色に関心を高めるとともに、持続可能な社会づくりの課題解決に向けて意欲的に追究しようとしている。
【社会的事象への関心・意欲・態度】
- ◎ 日本の人口問題を通して、人口面から見た日本の地域的特色を、図式化して自分の言葉で説明することができる。
【社会的な思考・判断・表現】
- 日本の人口問題を通して、持続可能な社会づくりのために合理的判断をすることができる。
【社会的な思考・判断・表現】
- 人口のメカニズムや、日本の人口の変化や人口の減少に関して、本文や資料から読み取ることができる。
【資料活用の技能】
- 日本の人口の歩みと、日本の人口の地域的特色を理解している。
 - ・わが国の人口変動の3要素
 - ・近代社会に進むと多産多死から少産少死へ変化していく人口転換論
 - ・東京一極集中による人口のブラックホール化現象に伴う人口減少【社会的事象についての知識・理解】

5 学習指導過程（全5時間）※下線：学習課題、二重下線：単元を貫く問い

過程	教師による発問・指示	期待される生徒の反応・ <u>獲得させたい知識概念</u>
<p>第1次 世界の人口分布についての事実認識</p>	<p>1 なぜ世界の人口は、増加したのだろうか。</p> <p>2 世界の人口密度には、どのような特色があるだろうか。資料①</p> <p>3 各国の人口構成は、何を見たらよいだろうか。また、どのような形があるのだろうか。どのような特徴があるのだろうか。資料②</p> <p>4 この人口ピラミッド(産油国)は、どうしてこのような形になるのだろうか。資料③</p> <p>5 <u>このことから人口が変化する要因は何だろうか。(学習課題1)</u></p> <p>6 世界地図と人口ピラミッドには、どのような関係があるだろうか。資料④</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・食料が増産されてきた ・医療の発達で死亡率が低下した ・人口密度が高い地域は、農業や工業が発達している都市部に集中 ・人口密度が低い地域は、砂漠、寒冷地、高地など <u>人口の分布は、地形や気候などの自然条件だけでなく、社会や経済の状態にも影響を受ける</u> ・人口ピラミッド ・富士山型→多産多死、つりがね型→多産少死、つぼ型→少産少死 ・外国人労働者が移動してきたから ・<u>出産、死亡、移動(人口構成の3要素)</u> ・発展途上国では富士山型、先進国になりつつある国ではつりがね型、先進国ではつぼ型
<p>第2次 日本の人口分布についての事実認識</p>	<p>7 日本の人口の推移は、どのように変化しているか。3段階で人口が増加した理由は、何だろうか。資料⑤</p> <p>8 日本の人口ピラミッドの変化を歴史年表を見て読み取る。資料⑥</p> <p>9 <u>日本の人口ピラミッドの変化と世界の人口ピラミッドの変化から分かることは何か。(学習課題2)</u></p> <p>10 なぜ、経済が発展するにつれ、多産多死から多産少死を経て少産少死へ移行するのか。 資料⑦、⑧、⑨、⑩</p> <p>11 人口が減少すると何が問題なのだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・3段階で増加している。 ・1段階は採集や縄文文化 ・2段階は弥生時代から始まった農業革命 ・3段階は産業革命 ・1920年戦争で20～30歳代で男性人口減少 ・1950年戦争動員により出生数が減少している ・1980年第1次、第2次ベビーブーム ・2010年第3次ベビーブーム起こらず減少 ・2040年やせ細ったつぼ型、人口減少 ・<u>経済が発展するにつれ、多産多死から多産少死を経て少産少死へ移行する。(人口転換論)</u> ・医療技術、栄養、衛生の向上で死亡率が減少するから。 ・女性の労働率が上がるので、出生率が下がるから。 ・労働者が減り、現在の経済活動が維持できなくなる。 ・生活レベルが破綻する。

	<p>12 1878年と1985年の20位までの日本の都市人口の推移を、白地図に記入し、気付いたことは何か。 資料⑩</p> <p>13 <u>資料⑫、⑬、⑭、⑮からどのようなことが分かるか。(学習課題3)</u></p> <p>14 過疎地域の人口ピラミッドから気付くことは何か。 資料⑯</p>	<ul style="list-style-type: none"> 太平洋側の都市の人口が日本海側よりも増加している。 人口が太平洋側に多く移動したのではないか。 太平洋側の三大都市圏、特に東京が過密になっている。(東京一極集中) 老年人口の割合が高く、人口密度が低い過疎地では、「消滅可能性都市」になっている。 「消滅可能性都市」は、特に北海道、東北地方、山陰地方、四国地方に多い。 高齢者が多く、年少者が少ない。 人口減少している。
<p>第3次 個人の側からの仮説設定</p>	<p>15 なぜ、東京一極集中が起きるのか。</p> <p>16 東京大都市圏等の過密地域は、若者の移動が多いので人口増加が見込めるのだろうか。 資料⑰</p> <p>17 なぜ東京で、高齢化が進んでいるのだろうか。</p> <p>18 東京の出生率はどれだけか。 資料⑱</p> <p>19 <u>東京大都市圏は、全国から多くの若者が移動してきているのに、なぜ少子化が進むのだろうか。(学習課題4)</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> 大学や企業、娯楽施設が多いので、<u>地方から若い世代が移動する</u>から。 年少者の割合が高くなく、意外にも少子化である。 第1次ベビーブームの世代が大量に移動してきて、そのまま年齢を重ねたから。 東京の出生率は1.13 (日本最低) である。 仮説1：家族で住む適当な広さの住宅地が手に入らないからではないか。 仮説2：母親が働きながら子育てしにくい環境だからではないか。 仮説3：結婚が遅くなるからではないか。
<p>第4次 社会の側からの仮説吟味 (本時)</p>	<p>(仮説1・2について)</p> <p>20 なぜ家族で住む適当な広さの住宅地が持てないのだろうか。 資料</p> <p>21 平均通勤時間はどれくらいか。 資料</p> <p>22 この通勤時間の長さは、子育てにどのような影響が考えられるか。</p> <p>23 東京の待機児童数はどれだけか。 資料</p> <p>24 なぜ両親に子どもを預けないのか。 (仮説3について)</p> <p>25 東京の平均結婚年齢、出産年齢、生涯未婚率はどれだけか。 資料</p> <p>26 なぜ結婚が遅くなるのだろうか。 資料</p> <p>27 地価高騰や長時間通勤、待機児童等は、何が原因で生じているのか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 住宅不足から地価が高騰、家賃が高く狭いアパートになる。 地価高騰から郊外に住むことで長時間通勤になり共働きがしにくい。 男性1.32時間、女性1.04時間 勤務している場合、保育園に預けても迎えに行くのが困難である。 共働きがしにくいので、収入も半減するので養育費が足りなくなる。 7,814人で全国1位である。 地方出身の人は、近くに両親が居ないから。 いずれも第1位である。 仕事や娯楽施設が充実しているから。 過密

	28 東京大都市圏の過密は、地方と東京にどのような影響を与えているのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> 地方は若い世代が流出して過疎化が進み、少子高齢化が進み、人口が減少する。 東京は、若い世代が流入して過密化しているが、育児環境が悪く出生率が極めて低下しており少子化が進み人口が減少している。 地方の少子高齢化と人口減少だけでなく、東京大都市圏にも少子高齢化と人口減少をもたらし、日本の少子高齢化を急速に進行させる原因になっている。
第5次 仮説の修正 ・再設定	29 <u>少子化を食い止めるためには、どうすればよいのだろうか。</u> (学習課題5)	<ul style="list-style-type: none"> 女性が働きながら子育てできる環境をつくる。 地方に若者をとどまるよう、中央の機能を分散させればよい。 工場、企業を誘致したり観光を充実させたりすることで、Uターン人口を増やせばよい。

6 本時の学習（全4／5時間）

(1) 指導目標

東京大都市圏に多くの若者が移動しているにも関わらず少子化が進行している背景・原因・影響を社会の視点から探究することで、日本の人口的・地域的特色である過密の問題点や少子化が急速に進行する構造を理解できるようにする。

(2) 展開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
1 前時までの内容を確認する。 2 課題を把握する。	<ul style="list-style-type: none"> ICTを使用して、前時までの内容を振り返りやすくする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 東京大都市圏は、全国から多くの若者が移動してきているのに、なぜ少子化が進むのか。 </div>	
3 個人の側の仮説を社会の側から吟味する。 <ul style="list-style-type: none"> 仮説1：家族で住む適当な広さの住宅地が手に入らないからではないか。 仮説2：母親が働きながら子育てしにくい環境だからではないか。 仮説3：結婚が遅くなるからではないか。 (仮説1・2について) <ol style="list-style-type: none"> なぜ家族で住む適当な広さの住宅地が持てないのだろうか。 <ul style="list-style-type: none"> 住宅不足から地価が高騰、家賃が高く狭いアパートになる。(過密) 地価高騰から郊外に住むことで長時間通勤になり共働きがしにくい。(過密の影響) 平均通勤時間はどれくらいか。 <ul style="list-style-type: none"> 男性1.32時間、女性1.04時間 この通勤時間の長さは、子育てにどのような影響が考えられるか。 <ul style="list-style-type: none"> 勤務している場合、保育園に預けても迎えに行くのが困難である。 共働きがしにくいので、収入も半減するので養育費が足りなくなる。 東京の待機児童数はどれだけか。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時に出た仮説を掲示していく。 資料をもとに答えさせていく。 考えにくい場合は、過密の問題から整理し、一つ一つの問題の影響を考えていくようにする。 自分の生活経験も結びつけるようにする。 資料をもとに答えさせていく。 資料をもとに答えさせていく。 資料をもとに答えさせていく。

・7,814人で全国1位である。

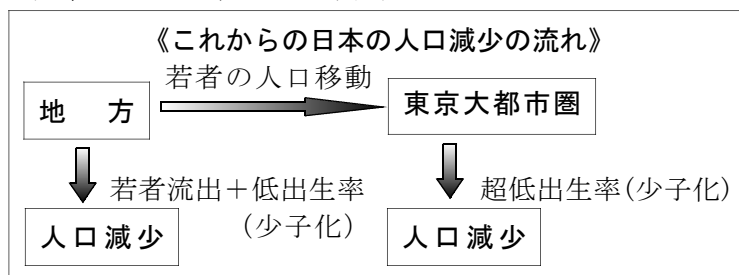
- 5) なぜ両親に子どもを預けないのか。
・地方出身の人は、近くに両親が居ないから。

(仮説3について)

- 6) 東京の平均結婚年齢、出産年齢、生涯未婚率はどれだけか。
・いずれも第1位である。
- 7) なぜ結婚が遅くなるのだろうか。
・仕事や娯楽施設が充実しているから。

4 地方と東京による二重の少子化の構造を生徒が図を用いて説明し合い、理解を深める。

- 1) 東京大都市圏の過密は、地方と東京にどのような影響を与えているのだろうか。
・地方の少子高齢化と人口減少をもたらすだけでなく、東京にも少子高齢化と人口減少をもたらし、この二重構造が日本の少子高齢化・人口減少を急速に進行させる原因になっている。
- 2) 東京大都市圏の過密による、日本の人口減少の流れを図式化してみよう。
(生徒が示して欲しい基本図)



5 次時の予告

「少子化を食い止めるためには、どうすればよいのだろうか。」について考えていくことを告げる。

・資料をもとに答えさせていく。

・資料をもとに答えさせていく。

・地方と東京に分けて、まとめていく。

・ワークシート上で、用語を移動させて思考しやすいように付箋を用いる。

・付箋には、あらかじめ最低限必要と思われる用語「地方」「東京大都市圏」「人口減少」(2つ)を用意させる。

・説明させる図には、「矢印」や別の用語の付箋を追加してよいことを告げる。

・個人作業の後、ペアで説明し合う。

・意図的指名で全体で発表させる。

(3) 学習評価の視点

- ・東京大都市圏の過密の問題点を探究するなかで、日本の人口的・地域的特色である人口減少の因果関係を図式化し表現している。【社会的現象への思考・判断・表現】(発言やノート等)

7 授業観察の視点

- ・社会システムの視点から、東京大都市圏の人口集中の背景・原因・影響を探究することは、日本の人口的・地域的特色を理解することに効果的であったか。
- ・「これからの日本の人口減少の流れ」を生徒に図式化し説明させる手立ては妥当だったか。
- ・「学習課題」や「問い」は、思考を促すものであったか。

【主な参考文献】

【方法論】

- ・岡崎誠司『変動する社会の認識形成をめざす小学校社会科授業開発研究』風間書房、2009年
- ・岡崎誠司『見方考え方を成長させる社会科授業の創造』風間書房、2013年
- ・太田政男著『アクティブな授業をつくる 新しい知的生産技術』学芸みらい社、2016年
- ・『社会科教育』明治図書、9月号2016年、2月号2017年

【内容論】

- ・赤川学『これが答えだ！少子化問題』ちくま新書、2017年
- ・伊藤彰芳『東大のクールな地理』青春出版社、2016年

- ・NHKスペシャル「私たちのこれから」取材班/編『超少子化』ポプラ新書、2016年
- ・小谷恵津子「概念探究型社会科における納得をともなう概念の獲得と経験ー中学校地理的分野「人口から見た日本」の開発を通してー」全国社会科教育学会『社会科研究』第62号2005年
- ・河野稠果『人口学への招待』中公新書、2007年
- ・鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫、2000年
- ・高崎順子『フランスはどう少子化を克服したか』新潮新書、2016年
- ・谷謙二「空間スケールに対応した人口ピラミッドの形状分類と人口学習」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No. 125(2015. 9)
- ・増田寛也『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』中公新書、2014年
- ・増田寛也・富山和彦『地方消滅 創生戦略編』中公新書、2015年
- ・牧野知弘『空き家問題 1000万戸の衝撃』祥伝社新書、2014年
- ・吉川洋『人口と日本経済』中公新書、2016年

8 知識・概念の構造図 単元「世界から見た日本の地域的特色 —人口の特色—」の場合

